



“イ短調の世界” — イ短調の名曲を探る



プログラム

“調性”を特集するシリーズの第7回目は、イ短調で書かれた名曲を集めてお聴きいただきます。

チャイコフスキーのピアノ三重奏曲は41、2歳の頃の作品で、副題の偉大な芸術家とは、盟友ニコライ・ルビンシテインの事で、その死を追悼して作曲されました。悲痛なほの暗さが全体を支配していますが、楽しかった師との思い出が緻密な技法で描かれ、最後は葬送行進曲で締めくくられます。ピアノ三重奏曲としては規模もスケールも大きな傑作です。グリークのピアノ協奏曲は25歳の時に書かれた初期の作品ですが、ピアノの名手でもあったグリークらしく、華麗な技巧と民謡風の美しい旋律が見事にオーケストラと絡み合って絶妙の効果を発揮しています。古今のピアノ協奏曲の名曲のひとつです。シューマンのチェロ協奏曲は、すでに精神の病が進行していた40歳の晩年に完成させた名作。管弦楽は控えめながら、高度な演奏技巧を駆使したロマンの香り漂う豊かな詩情は、シューマンならではの魅力に溢れています。メンデルスゾーンの交響曲第3番は1829年イギリスを訪れた際、スコットランドの古城に心を揺さぶられて冒頭の楽想を書き上げたと言われていています。幻想的で描写性の強い作品ですが、豊かな旋律と優美なロマン性はメンデルスゾーンの代表作というばかりでなく、ロマン派交響曲の傑作のひとつに数えられています。今回は、イ短調の名曲をたっぷりお聴きください。

ピョートル・チャイコフスキー (1840~1893): ピアノ三重奏曲イ短調op.50 “偉大な芸術家の思い出に”

～ 第1楽章から、第2楽章の終曲

ダン・タイ・ソン (ピアノ) / ヨゼフ・スーク (ヴァイオリン) / 堤 剛 (チェロ)
(1989.7.24 サントリーホールでのLive)

エドゥアルド・グリーク (1843~1907): ピアノ協奏曲イ短調op.16

レイフ・オーヴェ・アンズネス (ピアノ)
ドミトリ・キタエンコ指揮ベルゲン・フィルハーモニー管弦楽団
(1993.6.15 グリークホールでのLive)

*** 休憩 ***

ロベルト・シューマン (1810~1856): チェロ協奏曲イ短調op.129 ~ 第1楽章、第2楽章から、第3楽章から

リン・ハレル (チェロ)
ロリン・マゼール指揮バイエルン放送交響楽団
(1993.7.7 キツシンゲン、レーガンテンバウでのLive)

フェリックス・メンデルスゾーン (1809~1847): 交響曲第3番イ短調“スコットランド”op.56

～ 第1楽章、第3楽章から、第4楽章

グスターボ・ドウダメル指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(2011.12.11 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)